

歴史読物

陰謀の 鎌倉幕府

〜執権北条氏をめぐる内紛クロナイクル〜

鳥越
一朗



成立から滅亡までの150年間、陰謀・謀略・裏切りに明け暮れた鎌倉幕府——その中心にいたのは、執権をはじめ幕府の要職を独占した北条氏一族だった。

頻発した内紛・事変における彼らの狙いは何だったのか。そして、その戦略は？「歴史再発見の名手」が一つひとつ解き明かしていく。

はじめに

一般の人が持つ鎌倉幕府のイメージとは、どのようなものだろうか。

武士が初めてつくった本格的な政権。将軍に代わって、執権が政治を担った統治体制。「承久の乱」において、朝廷軍を武力で鎮圧。元寇（蒙古襲来）では、「神風」のおかげで、元の大軍を二度にわたって撃退。しかし、その負担が衰退を招き、後醍醐天皇の挙兵によりあっけなく滅亡——といった感じであろうか。

日本史の中で鎌倉時代は、戦国時代や幕末に比べて、圧倒的に人々の関心の薄い時代であろう。それは、NHK大河ドラマでの取り上げ回数少なさにも如実に表れている。百五十年に及ぶ長さの割には、表向きの変化に乏しいことが影響しているのかもしれない。しかし、鎌倉時代は、そんなに単調で面白味のない時代だったのか。

鎌倉幕府の創始者は、言うまでもなく源頼朝だが、源氏の将軍は、頼朝・頼家・実朝の三代しか続かなかった。鎌倉幕府の将軍はその三代で終わったと思っている人は、存外多いかもしれない。実は、その後も摂家及び皇族から、幕府の滅亡まで将軍は立てられていく。

もっとも、彼らは皆、ほとんど実権を持たなかった。将軍を「飾り雛」としながら、実際に幕府の政治を動かしたのは、執権を中心とする御家人たちであった。ここが、後年の武家政権である室町幕府・江戸幕府と決定的に異なる点である。

こうした政治構造の元、上記イメージのような表面的な事項とは別に、幕府内部では、教科書にはあまり出てこない、凄まじい権力闘争が行われた。そもそも武士とは、武力にものを言わせて、物事の解決を図ろうとする、やくざな存在である。

そんな武士たちが初めて政府をつくったのだから、当然と言えば当然だが、しかし、だからと言って許される以上の多くの血が流された。しかも、その戦いの様相は、忠孝・信義・節操を旨とする「弓馬の道」（武士道）とは、かけ離れたものだった。

多くは陰謀・謀略というアンフェアな形態をとったのである。しかし、陰謀・謀略とは、概して人間の本性を露にする人間ドラマの縮図でもある。面白くないはずがない。そして、これでもかというほど繰り返された内紛の中心にいたのは、執権職を独占し続けた北条氏一族であった。

伊豆国の一土豪に過ぎなかった北条氏は、源氏嫡流ながら流人であった頼朝を婿としたがために、図らずもこの時代の主役に押し出された。そして、絶え間なく出現する対抗勢力を、手段を選ばず排除しながら、曲がりなりにも、七百年にわたる武家社会の礎を築いたのである。

本書は、主に北条氏の絡んだ陰謀・謀略事件を取り上げ、その背景や中世人の心情にも思いを馳せながら、鎌倉幕府のドラマティックな一面を浮き彫りにしようと試みたものである。そして、今まで鎌倉時代を敬遠しがちだった人にも、「本当は面白い」この時代の息吹を楽しんでもらえたら、と考えたのである。

その試みが成功するか否か。それでは、時間を八百数十年巻き戻し、陰謀をめぐる物語の扉を開けることにしよう。

第一章 平氏討伐まで ～ 1185

- ① 頼朝拳兵ゝ祭りのタイミングを狙って山木兼隆を討つゝ……………12
- ② 石橋山合戦ゝ頼朝を助けた梶原景時の思惑ゝ……………16
- ③ 富士川の戦いゝ逆効果だった善意の情報提供ゝ……………21
- ④ 金砂城の戦い（佐竹氏討伐）ゝ上総広常による「だまし討ち」ゝ……………24
- ⑤ 亀の前事件ゝ半端ない政子の嫉妬ゝ……………26
- ⑥ 上総広常誅殺ゝ双六の最中の不意打ちゝ……………28
- ⑦ 木曾義仲討伐ゝ法皇と頼朝の水面下の交渉ゝ……………31
- ⑧ 木曾義高（義仲の長男）誅殺ゝ悲劇の人質ゝ……………33
- ⑨ 兄・頼朝に無視された義経の腰越状ゝ梶原景時讒言の効果ゝ……………36

第二章 源氏将軍誕生まで ～ 1193

- ⑩ 義経暗殺未遂事件ゝ頼朝が送り込んだ刺客・土佐坊昌俊ゝ……………38
- ⑪ 河越重頼誅殺ゝ頼朝・義経対立のとばっちりゝ……………40
- ⑫ 源行家斬首ゝ令旨を伝えた叔父を討つゝ……………42
- ⑬ 日本一の大天狗ゝ後白河法皇の策略ゝ……………44
- ⑭ 義経討たれるゝプレッシャーに負けた藤原泰衡ゝ……………47
- ⑮ 奥州征伐ゝ義経斬首への言いがかりゝ……………49
- ⑯ 安田義資殺害ゝラブレターが命取りにゝ……………52

〔表1〕鎌倉幕府将軍一覧……………

第三章 第二代将軍・源頼家追放まで ～ 1203

- ⑰ 曾我兄弟の仇討ちゝなぜか北条時政が支援ゝ……………56
- ⑱ 源範頼処刑ゝ政子を励ましたばっかりにゝ……………59

①9	頼朝落馬死の謎〜義経らの怨霊のせい？	62
②0	十三人合議制〜頼家から権限を取り上げる	64
②1	安達景盛討伐未遂事件〜愛人を奪われた拳句に	67
②2	梶原景時敗死〜六十六人による弾劾状	69
②3	越後城氏の乱（建仁の乱）〜梶原景時への弔い合戦	73
②4	阿野全成の乱〜北条時政父子に見捨てられる	76
②5	比企氏の乱〜仏事にことよせ誅殺	78
②6	仁田氏滅亡〜北条時政と將軍・頼家の板挟みに	81
第四章 第三代將軍・源実朝暗殺まで〜1219		
②7	フライングだった実朝の後継決定〜北条時政が初代執権に	84
〔表2〕	執権一覧	85
②8	三日平氏の乱〜平氏残党が蜂起	87
②9	頼家暗殺〜決行を命じたのは祖父か母か	89
③0	畠山合戦（二俣川合戦）〜飛んで火にいる夏の虫	91
③1	稲毛重成謀殺〜陰謀の片棒を担がされたばかりに	95
③2	牧氏の変〜後妻の言うがままに？	98
③3	北条時政出家〜娘と息子に追放されて	100
③4	平賀朝雅誅殺〜もろくも崩れた將軍就任の夢	102
③5	宇都宮頼綱討伐未遂事件〜義兄弟に救われる	104
③6	泉親衡陰謀事件〜頼家遺児・栄実擁立の嫌疑	107
③7	和田合戦〜奏功した北条義時の挑発	109
③8	畠山重慶謀反〜討ち手・長沼宗政の確信	113
③9	頼家遺児・栄実の謀反〜和田氏の残党が計画？	115
④0	実朝暗殺〜北条義時は事前に知っていた？	117

第五章 第五代将軍・九条頼嗣追放まで ～ 1251 …… 121

- ④1 阿野時元拳兵事件／頼朝の甥として次期将軍の座を狙う …… 121
- ④2 三寅（九条頼経）の鎌倉下向／親王の代わりに選ばれた二歳の童児 …… 123
- ④3 源頼茂謀反事件／将軍になろうとした？源頼政の孫 …… 126
- ④4 禅暁誅殺／頼家の男子、掃討される …… 128
- ④5 承久の乱勃発 …… 129
- ① 後鳥羽上皇の事前工作／幕府側の分裂を図る …… 129
- ② 尼将軍・政子の名演説／宣旨の趣旨をすり替える …… 131
- ③ 後鳥羽上皇の手のひら返し／朝廷方御家人たちを切り捨てる …… 133
- ④ 皇族配流と六波羅探題設置／北条義時の朝廷への仕打ち …… 136
- 〔表3・表4〕六波羅探題（北方・南方）一覽 …… 139
- ④6 伊賀氏の変／北条義時未亡人のクーデター計画 …… 140
- 〔表5〕連署一覽 …… 142

- ④7 宮騒動（名越の乱）／将軍・頼経を巻き込んだ北条氏の内部抗争 …… 143
- ④8 宝治合戦／安達景盛の挑発により三浦氏滅ぶ …… 148
- ④9 建長の乱／第五代将軍・頼嗣、謀反の疑いで追放される …… 152

第六章 第七代将軍・惟康親王追放まで ～ 1289 …… 156

- ⑤0 第六代将軍・宗尊親王の謀反／妻の不倫が原因か？ …… 156
- ⑤1 四人目の源氏将軍誕生／惟康、臣籍降下の狙いとは …… 159
- ⑤2 二月騒動／名越兄弟の謀反と北条時輔の殺害 …… 162
- ⑤3 時宗の皇位介入／図らずも「南北朝」の発端に …… 164
- ⑤4 幕府要人の遁世事件／独裁者・北条時宗への反抗か …… 167
- ⑤5 寄合（深秘の御沙汰）／時宗の独裁体制を支えた秘密会議 …… 169
- ⑤6 異国征伐計画／北条時宗の誇大妄想 …… 171
- ⑤7 北条氏佐介流の没落／寄合衆による反得宗勢力の排除 …… 174

⑤8 霜月騒動／平頼綱VS安達泰盛／……………175

⑤9 第七代将軍・惟康の追放／涙の鎌倉出立／……………178

第七章 幕府滅亡まで／1333……………181

⑥0 伏見天皇殺害未遂事件（浅原事件）／背後にちらつく両党迭立問題／……………181

⑥1 平禅門の乱／恐怖の平頼綱、震災のドサクサに討たれる／……………183

⑥2 吉見義世の謀反／北条施政に反抗した源範頼の子孫／……………186

⑥3 嘉元の乱／謎に包まれた北条時村殺害の真相／……………189

⑥4 正中の変／発覚した後醍醐天皇の倒幕計画／……………191

⑥5 嘉暦の騒動／十日で辞任した執権・北条（金沢）貞顕／……………194

⑥6 元弘の変／後醍醐天皇、再び倒幕に立ち上がる／……………197

⑥7 鎌倉幕府滅亡／御家人たちの相次ぐ寝返り／……………199

あとがきに代えて……………204

関連系図……………207

清和源氏系図／北条氏系図／伊東氏系図／北条時政女子婚姻図／源氏・摂家・親王将軍系図／天皇家系図／
 天皇家・親王将軍系図／北条義時の妻と男子／安達氏・北条氏関係図／三浦氏・北条氏関係図

関連年表……………220

主な参考文献……………227

著者プロフィール……………229

第一章 平氏討伐まで

1185

伊豆に流されていた源氏の嫡流・源頼朝は、以仁王から平氏追討の令旨が発せられると、岳父・北条時政らの協力を得て拳兵。石橋山の合戦で敗れるものの、関東の反平氏勢力を糾合して鎌倉へ入る。富士川の戦いで平氏軍を破るが、まずは関東の平定に注力した。その間に同じ源氏の本曾義仲が平氏を都落ちさせ、入京を果たす。頼朝は弟・義経らを派遣して、義仲を滅ぼし、さらには壇ノ浦の合戦で平氏を滅亡させた。

① 頼朝拳兵く祭りのタイミングを狙って山木兼隆を討つ

源頼朝は、久安三年（一一四七）四月八日、清和源氏の一流、河内源氏の六代目棟梁・源義朝の三男として京都で生まれた。母は熱田神宮の神官・藤原季範の娘、由良御前だ。

平治元年（一一五九）十二月、頼朝は父・義朝とともに藤原信頼に付いて、藤原通憲（信西）を追放するクーデター「平治の乱」を起こすが、信西側の平清盛との戦いに敗れ、義朝は謀殺され、自らは本来なら死刑は免れなかったところを、清盛の継母・池禅尼の嘆願もあって、死一等を減ぜられ、

翌永暦元年（一一六〇）年三月、伊豆国へ配流処分となった。

伊豆国は律令制において、佐渡・隠岐・安房・土佐・常陸とともに「遠流」の地に定められていたが、頼朝の配流先が鎌倉に近い伊豆ではなく、佐渡や隠岐であったなら、その後の鎌倉幕府は誕生しなかったかもしれない。

ともあれ、その伊豆で頼朝の監視役になったのが、現地の平氏方の土豪、北条時政であった。この時、頼朝十四歳、時政二十三歳。のちの鎌倉幕府初代將軍と初代執権の、運命的な出会いであった。北条氏は、桓武平氏の当主・平直方を始祖とし、時政の祖父・時家の代から伊豆国田方郡北条（静岡県伊豆の国市）に住したことから、北条氏を名乗るようになったとされ、当時の時政は、伊豆国の在庁官人（地方役人）といった立場だったようだ。

さて、頼朝の伊豆配流から二十年近く経ち、時政が京都大番役（地方の武士に命じられた京の警固役）勤務のため京にあった時、あろうことか時政の娘・政子が頼朝と恋に落ちた（政子は頼朝の十歳年下で、当時二十代の半ばであった）。

こんなことが、平氏方の耳に入ったら大変である。時政は二人の関係を許さず、政子を伊豆国目代（国守の代官）の山木兼隆と結婚させた。

当時の伊豆国は「平氏にあらざんば人にあらざ」とうそぶいた平時忠の知行国であったが、時忠は在京だったので、時忠の元で活躍していた兼隆を目代に任命し、国務に当たらせていたのだ。しかし、障害が多いほど燃え上がるのは、古今変わらぬ恋愛の法則である。政子は山木の屋敷を抜け出し、

伊豆山（静岡県熱海市）にいる頼朝の元へと走ったのだった。

ここで、武家の親ならば、力づくでも娘を連れ戻すだろうと思いきや、時政は意外にも、二人の仲を認め、頼朝の監視者から後援者に立場を変えてしまう。もとより、時政の決断は、娘のわがままを渋々認めた、というレベルのものではなかったろう。

時政の大番役勤務は、治承元年（一一七七）から同二年のこととされる。京ではちょうど、（後白河法皇の近臣が平氏討伐の謀議をした）鹿ヶ谷事件の勃発した頃だ。時政は、平氏政権の行き詰まりを感じ、北条氏が生き延びるための方策として、源氏の嫡流である頼朝に賭けることを、むしろ積極的に選んだのかもしれない。

ところで、頼朝はこれ以前にも、似たような恋愛沙汰を起こしていた。安元元年（一一七五）頃、伊豆の豪族、伊東祐親の娘・八重姫と、やはり祐親が大番役のため上洛している間に関係を持ち、千鶴丸という男子を成しているのだ（二一〇頁系図3参照）。

祐親は、時政とともに頼朝の監視役を務めており、時政は祐親の娘を妻としていた（すなわち頼朝は、自分の監視役二人の、それぞれの娘に手を出していたことになる）。

祐親もまた平家の怒りを恐れ、三歳の千鶴丸を柴で包んで縛り、重しを付けて松川の轟ヶ淵に沈めて殺した（柴漬の刑）。さらに祐親は、頼朝の殺害を図ったが、頼朝に好意的な祐親の次男・祐清（頼朝の乳母・比企尼の三女を妻としていた）がそれを頼朝に知らせたため、頼朝は事前に時政の元へ逃亡し、事なきを得たのだった（八重姫については、その後入水したとも、時政の孫・泰時に嫁いだとも伝えられる）。

ともあれ、源氏に寝返った時政と平氏方に残った祐親。それが両人の運命の分かれ道となるが、それについては後述することになる。

治承四年（一一八〇）四月、以仁王が平氏追討の令旨を全国の源氏に向けて発し、頼朝の叔父・源行家によって伊豆の頼朝にも伝えられた。しかし、二十年の間、流人の生活を送っていた三十四歳の頼朝に、今さら平氏を討とうというような気概が残されていなかったか。

『平家物語』では、文覚上人が義朝の髑髏を持って、頼朝の元を訪ね、決起を促したとするが、おそらくは、時政もチャンス到来とばかりに頼朝をけしかけたに違いない。頼朝はついに拳兵を決意する（もつとも、平氏が諸国の源氏を追討しようと動き始めており、頼朝も尻に火がついた状況であったから、必要に迫られての決断であったともいわれる）。

時政のほか伊豆・相模国の武士、岡崎義美・土肥実平・加藤景廉・堀親家・佐々木定綱兄弟らが頼朝に従った。その中で、参謀役として頼朝が最も頼りにしたのは、やはり四十三歳の舅、時政であった。



頼朝に平氏討伐の拳兵を促したとされる神霊を祀る佐助稻荷神社（鎌倉市佐助）
提供：鎌倉市観光協会



石橋山古戦場(神奈川県小田原市)

頼朝と時政はまず、伊豆国目代の山木兼隆を攻撃目標とした。頼朝にとっては、政子をめぐっての恋敵でもあったが、時政には、かつて自ら娘の結婚相手として選んだ人物。それを躊躇なく攻撃目標とするあたり、時政の非情ぶりが伺える。

山木館は山に囲まれた要害の地(静岡県伊豆の国市韮山)にあったため、頼朝と時政らは、右筆(武家の秘書役・書記)の藤原邦通に命じて、(酒宴に乗じて)山木館周辺の地図を手に入れさせ、その地図を元に綿密な計画を練った。そして、治承四年(一一八〇)八月十七日の夜中、頼朝の軍勢は一挙に山木館を襲い、兼隆を討ち取ることに成功したのだった(討ったのは加藤景廉)。

ところで、この日は、三島大社(静岡県三島市)の祭礼の日に当たっており、山木氏の郎党の多くは、同社の神事を見学するため、出払っていた。当時の人々にとって、祭りは、日常を忘れて羽目を外せる貴重な年間行事でもあった。

山木の郎党たちは、神事が終わったあとも、そのまま黄瀬川宿(静岡県沼津市)に留まって、遊び歩いていたという。郎党らの不在で、兼隆は満足に応戦できる状態ではなかったに違いなく、頼朝と時政は、もちろんそこを狙ったのだった。

② 石橋山合戦、頼朝を助けた梶原景時の思惑

緒戦を飾った頼朝は、ついで相模の三浦一族と合流しようと、土肥郷(神奈川県湯河原町)まで

進むが、ここで平氏方の土豪、大庭景親・俣野景久ら三〇〇〇余騎に行く手を阻まれる。治承四年(一一八〇)八月二十三日、景親らは夕刻から激しい雨をついて攻撃を開始、三〇〇余騎と勢力に劣る頼朝軍は、奮戦するも一敗地にまみれた。世に言う「石橋山合戦」である。

頼朝は土肥実平ら僅か六騎と洞窟(岩屋)に身を潜めたが、そこへ大庭景親の軍勢がやってくる。その中大庭氏と同族の梶原景時がいた。景親が洞窟の中を怪しむと、景時は名乗り出て一人で中に入り、潜んでいた頼朝を発見した。

頼朝は、もはやこれまでと自刃すべく刀の柄に手を掛けたが(源氏棟梁の自覚からか、命乞いという無様な姿はさらさなかったようだ)、景時は待てと言って思いとどまらせた。そして、何事もなかったように洞窟の外に出ると、

「中には虫一匹おらぬ」と景親に報告し、向こうの山が怪しいと言って、景親を導こうとした。それでも洞窟を不審に思う景親に対し、景時は、

「それがしが、中を見ておらぬと言うのに、疑いなさるのか!」と啖呵まで切った。

景時の剣幕に景親は渋々引き下がったのだが、この時、景時が頼朝を助けたのは、必ずしも「武士の情け」によるものではなかったようだ。

『源平盛衰記』では、景時は頼朝に自刃を辞めさせた際、

「そなたが戦に勝ったなら、自分のことを忘れてくれるな。敵の手にかかったとしても、草葉の陰から景時の武運を守ってくれ」と恩着せがましいことを言い残しており、頼朝の棟梁としての将来性を見込んで、取引をしたとも解されている。

その後日談は後述するとして、梶原景時の救いの手もあって、頼朝は九死に一生を得て、箱根山中（神奈川県箱根町）に逃れることができたのだった。この敗戦と洞窟での恐怖を、頼朝は一生忘れなかったという。

一方、北条時政も悲劇に見舞われた。時政は、嫡男・宗時、次男・義時とともに参戦していたが、激しい戦闘の中、頼朝らとはぐれてしまう。さらに、時政ら父子も分裂し、宗時と時政・義時は別行動をとった。

これは、父子がすべて行動を共にして、全滅すれば、お家が途絶えてしまうから、それを避けるために採られた戦略で、今でも企業などで、出張や社内旅行の際、社員をすべて同じ飛行機に乗せないようにするのが同じ理屈であった。

その結果、案の定というか、幸か不幸かというべきか、一緒に逃げた時政と義時は生き延びることが出来たが、彼らと別れて退却した宗時は、平井郷（静岡県函南町）に出たところで、伊東祐親の軍

勢に囲まれ、敵の矢を受け戦死したのだ。

祐親は、前述のとおり、かつて時政とともに流人・頼朝の監視役を務めており、祐親の娘は時政に嫁ぎ、宗時・義時を産んだとされる（二一〇頁系図3参照）。だとするならば、宗時は祖父の手によって死に追いやられたことになるのだが、ともあれ、長男・宗時の戦死によって、次男・義時が北条氏の嫡男となった。

北条義時は、長寛三年（一一六三）の生まれだから、この時十八歳。北条政子の六つ下の弟だ。江間四郎、江間小四郎とも呼ばれており、北条氏の勢力圏であった江間の地（静岡県伊豆の国市）と何らかの関係があったようである。

当時の武家社会で、嫡男と次男以下では、社会的な評価に大きな差があった。義時は、偶然にも時政の嫡男の地位を得たことで、後年、鎌倉幕府において、おいおい詳述するように、歴史に名を残す、大きな役割を果たすことになる。

さて、頼朝は箱根から安房国（千葉県南部）へ入り、時政らは甲斐源氏を頼り、それぞれに体制を立て直し、ほどなくして、房総の上総広常・千葉常胤、武蔵国の足立遠元、葛西清重、秩父一族の畠山重忠、河越重頼、江戸重長ら関東の武将を味方につけることに成功した。そして、十月六日、頼朝は参陣した数万騎を率いて、相模国の鎌倉に入ったのであった。

これほど、短期間に頼朝が関東の武士を糾合できたのは、それだけ彼らの間に、（何かと自分たちに不公平な）平氏政権への不満がくすぶっていたということだろう。この状況に一番驚いたのは、あ

るいは頼朝自身であったかもしれない。そして、改めて認識したに違いない。「源氏の貴種」というブランドの絶大なる値打を。

頼朝の怒涛の勢いに、石橋山の合戦で頼朝を攻めた、平氏方の武将たちも続々と投降し始めた。同月末には、大庭景親・河村義秀・荻野俊重らも頼朝に降伏し、臣従を願い出た。しかし頼朝は、それを認めず景親と俊重は処刑している。

義秀だけは大庭景義（大庭景親の兄で、弟と袂を分かち、一貫して頼朝に従っていた）に預けられ、十年後、鶴岡八幡宮で流鏑馬の妙技を披露したことにより、頼朝に罪を許されている（正に芸が身を助けたのだ）。

ともあれ、生殺与奪の権を手にした頼朝は、その快感に酔いしれ、おそらく生涯その呪縛から逃れられなかったのではないか。そして、梶原景時である。石橋山の合戦で頼朝を見逃した景時は、同年十二月に土肥実平を通じて頼朝に降伏、翌養和元年（一一八二）一月、頼朝に対面し、御家人に取り立てられた。

頼朝は洞窟での景時の言葉を忘れていなかったのである。景時の思惑はまんまと達せられたわけだが、景時がここで命拾いしたことにより、このち彼の「讒言ぐせ」によって、多くの血が流されることになる。

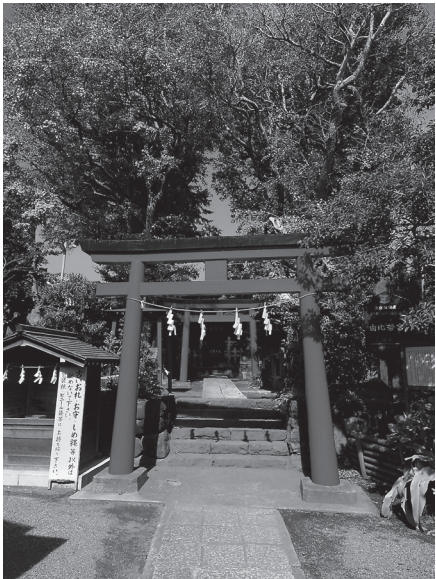
③ 富士川の戦い、逆効果だった善意の情報提供

治承四年（一一八〇）十月六日、鎌倉に入った頼朝は、以後鎌倉に拠点を置く。ではなぜ、鎌倉だったのか。鎌倉が、三方を山に囲まれ、一方が海に面した要害・要衝の地であることは、その大きな理由の一つだった。加えて鎌倉は、河内源氏の二代目棟梁・源頼義の時代から、同氏と深い関わりのある場所でもあった。

頼義は、長元元年（一〇二八）の「平忠常の乱」鎮圧の功により、相模守に任じられている。さらに、鎌倉の豪族・平直方にその器量を称賛されて、娘婿に迎えられ、鎌倉の地を譲られた。

頼義は、源氏の氏神である石清水八幡宮を鎌倉に勧請して、由比若宮（鶴岡八幡宮の前身）とし、以来、頼朝の父・義朝に至るまで、鎌倉は河内源氏の本拠地となっていたのだ（義朝は京都と鎌倉の間を頻繁に行き来していたようで、義朝の妻妾に、鎌倉と京都を結ぶ東海道沿線の地の遊女が多くなるのは、その証拠といわれる）。

頼朝が鎌倉へ入った五日後の十月十一日、妻・政子が鎌倉に到着している。前後して大倉郷に御



由井若宮(元八幡)(鎌倉市材木座)

著者プロフィール

鳥越一朗 (とりごえ・いちろう)

作家。京都府京都市生まれ。
京都府立嵯峨野高等学校を経て京都大学農学部卒業。
主に京都や歴史を題材にした小説、エッセイ、紀行などを手掛ける。
「オキナワの苦難を知る 伝えていこう! 平和」「明智光秀劇場百一場」「1964 東京オリンピックを盛り上げた 101 人」、「おもしろ文明開化百一話」、「天下取りに絡んだ戦国の女」、「ハンサムウーマン新島八重と明治の京都」、「電車告知人」、「京都大正ロマン館」、「麗しの愛宕山鉄道鋼索線」、「平安京のメリークリスマス」など著書多数。

写真協力

伊豆市観光商工課、(公財)岩手県観光協会、小田原市観光課、(公財)鎌倉市観光協会、(公財)小江戸川越観光協会、(公財)長浜観光協会

(順不同)

歴史読物 陰謀の鎌倉幕府 ～執権北条氏をめぐる内紛クロニクル～

定 価 カバーに表示してあります
発行日 2022年1月1日
著 者 鳥越一朗
デザイン 岩崎宏
編集・制作補助 ユニプラン編集部
橋本豪
発行人 橋本良郎
発行所 株式会社ユニプラン
〒601-8213
京都府京都市南区久世中久世町1丁目76
TEL075-934-0003
FAX075-934-9990
振替口座 01030-3-23387
印刷所 株式会社ティ・プラス
ISBN978-4-89704-540-5 C0021

校注・訳…梶原正昭『新編 日本古典文学全集六十二 義経記』小学館
訳…田中幸江・緑川新『完訳 源平盛衰記4』勉誠出版
後深草院二条(訳…佐々木和歌子)『とほざがたり』光文社
校注…弓削繁『六代勝事記・五代帝王物語』三弥井書店
川添昭二『北条時宗』吉川弘文館
渡辺保『北条政子』吉川弘文館
上横手雅敬『北条泰時』吉川弘文館
永井晋『金沢貞顕』吉川弘文館
木村英一『鎌倉時代公武関係と六波羅探題』清文堂出版
伊藤邦彦『「建久四年曾我事件」と初期鎌倉幕府』岩田書院
石井清文『鎌倉幕府連署制の研究』岩田書院
長村祥知『中世公武関係と承久の乱』吉川弘文館
村井章介『北条時宗と蒙古襲来』東京日本放送出版協会
二〇〇一年
二〇一五年
二〇二〇年
二〇一八年
二〇一六年
二〇〇三年
一九五八年
一九六一年
二〇〇一年
二〇〇〇年
二〇一九年
二〇〇五年
二〇〇〇年